

私の履歴書

前橋 汀子

東日本大震災の直後、私に何ができるのだろうかと思問しながら、すぐに海外へ出かけなければならなかった。居ても立ってもいられず、成田空港から電

話も立ててもいられず、成田空港から電話をかけた。相手はピアノリストの中村絃子さん。音楽を通じて1人でも多くのの方に何かを届けることができないかしら。そんな思いを彼女と共有できた。

中村絃子さん

「私に任せて」。中村さんが各方面に話をつけ、被災地支援コンサートの開催が決まった。あの行動力は彼女ならではのものだ。チェリストでサントリーホール館長の堤剛さんも協力してくれた。

2011年6月3日、東京

子供の頃からずっと同志

被災地支援 思いを共有

「ピースフル・コンサート」では3人でメンデルスゾーンのパiano三重奏曲を演奏した。中村さんの家で一緒に弾いた思い出の曲だった。中村さんは16年に亡くなった。長い間、一緒に頑張ってきた大切な友を失って、本当に寂しい。

私は東京芸術大学で非常勤講師を務め、大阪音楽大学で

中村さんと堤さんは「子供のための音楽教室」時代からの音楽仲間だ。中学生の頃には中村さんの家に泊まり、3人でいろんな曲を弾いて遊んだ。夜になると近所のおけけ屋敷に出かけた。真っ先に逃げたのが堤さんで、中村さんは全く動じなかった。彼女は当時から肝が据わっていて、1歳年下なのに頼もしい存在だった。

小学生の頃、古典芸能や芝居が大好きだった父に連れられて文楽を見たことを思い出す。父はクラシック音楽に全く関心のない人だったが、私にも父から受け継いだものが

あるのだと実感する。

大学で教える一方、自分が生徒になった時期もある。62歳から1年間、都立大泉高校の定時制課程に通ったのだ。

当時、本格的にスラブ民族史を学びたくなり、どの大学で

から始まり、彼らと同じように授業を受けた。生物や化学の面白さに目覚め、参考書や科学雑誌を買って読みふけた。ついて行けなかった授業は体育。私と同年配の女性がもう1人いて、彼女と体育館の床に座って見学していた。

期末テストは一夜漬けで頑張った。初めて答案用紙に名前を書く時は鉛筆を持つ手が震えたのを覚えている。15分遅刻すると欠席扱いになる。自転車で猛ダッシュして滑り込みセーフの日もあった。無事に卒業できて、先生方が駅前の居酒屋でお祝い会を開いてくれた時はうれしかった。



「ピースフル・コンサート」で共演（左から筆者、中村さん、堤さん）＝サントリーホール提供

講義が受けられるか調べてみたのだが、自分が高校を中退してソ連に留学したことに気づき、まずは高卒の資格を取ろうと思いついたのである。

夜学の生徒の大半は昼間に働く10代の若者。「前橋さん」「はい」と出席を取るところから始まり、彼らと同じように授業を受けた。生物や化学の面白さに目覚め、参考書や科学雑誌を買って読みふけた。ついて行けなかった授業は体育。私と同年配の女性がもう1人いて、彼女と体育館の床に座って見学していた。

（バイオリニスト）